

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32677

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884055

研究課題名(和文) ソーシャルメディアを用いたシェイクスピア受容状況調査

研究課題名(英文) Using Social Media to Understand the Reception of Shakespeare in Japan: A Feasibility Study

研究代表者

北村 紗衣 (KITAMURA, SAE)

武蔵大学・人文学部・講師

研究者番号：00733825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：SNSを利用した大規模な受容の調査については倫理的に問題があり、実施できないだろうという結論に達した。一方でSNSを用いてシェイクスピア劇の受容状況を調査する事例研究については、演劇においては上演中にリアルタイムでのツイートができないためツイッターハッシュタグのあり方が他のイベントと異なっていて活用がしづらい一方、うまくマーケティングツールとして利用している演劇祭や上演もあり、またツイッターを用いて活発に意見交換を行っている観客層も存在することがわかった。

研究成果の概要(英文)：It turns out that it is impossible to conduct a relatively large-scale research project to describe the use of social media by playgoers who see Shakespeare in Japan by creating a SNS or by utilising already existing SNSs, because of ethical reasons concerning privacy of fans.

研究分野：シェイクスピア

キーワード：シェイクスピア 演劇 観客研究 受容史 SNS デジタル人文学

## 1. 研究開始当初の背景

応募者はシェイクスピアの受容史研究の一環として、観客の反応を記述するための研究資料としてソーシャルメディアをいかに活用できるかという課題に取り組みました。本プロジェクトは応募者が有している二つの問題意識に基づいていました。

一つめはデジタル資料の保存についての危機感である。応募者がこれまで博士課程で取り組んできた研究は、刊本に残された署名や蔵書票を追跡することで過去の読者や観客の演劇受容の実態を探るといったものであった。この研究をすすめる中で応募者は、デジタル化の波により演劇史や書物史の研究者はこうした受容データの収集に困難をきたすようになるのではないかと危惧をも抱くようになった。応募者が博士課程在籍中に住んでいたロンドンでは、劇場はチラシよりソーシャルメディアを使って宣伝をし、観客も電子書籍になった戯曲を劇場に持ち込み、感想も紙の日記に書き残すのではなくブログに載せるようになってきている。こうした電子媒体は長期間保存することができる紙に比べると保存が難しく、今記述しなければ失われる可能性が高いと考えた。

二つめの問題意識としては、SNSを用いた演劇コミュニティの情報交換が英国などに比べて低調である理由はなぜかを探求したいということがあった。英国においては、ニュースサイト等に掲載される劇評などをめぐってSNSやブログで演劇ファンによる議論が起こり、文化予算の配分などについても意見交換が行われることがしばしばある。日本の舞台芸術を取り巻く状況は日々変化しており、東京都や大阪府など大きな地方自治体の演劇関連予算の配分などについてしばしば政治的議論が起こっている。さらに東京オリンピックの開催が決定したため、こうした国際的な文化イベントに舞台芸術部門はどのように対応すべきかということも取り沙汰されるようになってきている。こうした状況にもかかわらず、日本においてオンラインで演劇の観客が行う活動は英国に比べるとそれほど活発ではなく、また存在していても詳細に記述されることが少ないため、舞台芸術を取り巻く状況にひとりひとりの観客がどのような意見を持っているのか、またいかなる議論を行っているのかは比較的に見えにくいものとなっている。これは英国と日本の観劇文化やショービジネスの形態の差に基づくものであるとも考えられ、応募者はこの違いの解明のためにもオンラインの資料を用いて日本のシェイクスピア受容を記述したいという希望を持っていた。

## 2. 研究の目的

この実行可能性調査の主要な目的は大きく分けて二つあった。ひとつめは学術調査のために日本でシェイクスピアを受容している観客の受容行動に関するデータを収集するのにふさわしい手段を確定すること、ふたつめは日本の演劇コミュニティのオンライン上の活動の低調さの理由についてシェイクスピア受容を手がかりに考えることであった。大規模な受容研究を行うためには既存のSNSを活用するだけで十分か、それとも舞台の観客を対象とした小規模なSNSなど新たなプラットフォームを設置したほうがよいのか、ということ判断しようとした。

## 3. 研究の方法

以下の4つに課題を分けることにより、研究を実施しようとした。

- ・課題1: オンライン上に存在するシェイクスピアへの言及を、伝統的にシェイクスピア受容研究の資料として使用されてきたものと比較し、その性質を明らかにする。
- ・課題2: オンラインの資料を用いて受容研究をする際の倫理的な課題を検討する。
- ・課題3: SNSを調査する際にはどのような技術的課題を克服せねばならないのかに関して、情報技術分野の研究者や社会学分野のメディア研究者の協力をあおぎつつ検討する。
- ・課題4: シェイクスピアを見る観客がソーシャルメディアを用いてどのように情報を交換しているかについて最低一点、事例研究を実施して論文を執筆する。

## 4. 研究成果

当初計画では、実際にSNSを立ち上げたり、既存のSNSから情報を拾いあげたりすることで大規模なシェイクスピア受容に関する調査を実施できるか可能性を検討する予定であったが、既に研究の早い段階で観客のプライバシーに関する課題が多すぎる事が判明した。当初の研究計画にはもともと「観客の自由なファン活動を阻害する可能性がある」と判断した場合、応募者はその後の大規模な研究プロジェクトに移行することを断念する覚悟もできている」と記載していたが、ファンの中にはSNSなどの情報を拾いあげることに対する抵抗感も見受けられ、大規模計画の実施には問題があるという結論に達した。

このため、本研究は二年目の序盤より、計画書に記載したSNSにおける観客の活動に関する事例研究に移行した。主に演劇祭や上演のハッシュタグを通して観客の感想などを分析する調査を行った。この結果、ツイッターハッシュタグの利用については、演劇は他のイベントに比べると上演中のリアルタイムでのハッシュタグ利用が行われないため、ハッシュタグを活用しきれていないイベントがある一方、SNSをマーケティングツールや観客コミュニティの創出手段として効

果的に利用しているフェスティバルや劇場もあることがわかった。たとえば、オレゴン州アッシュランドで開催されているオレゴン・シェイクスピア・フェスティバルでは、観客全員に無料でパンフレットを配布し、それぞれの演目ごとに割り振った公式ハッシュタグを周知している。これにより、公演ごとにハッシュタグを用いることでユーザは他の観客やフェスティバルの主催者公式アカウントなどと情報交換することができる。また、2015年のベネディクト・カンバーバッチ主演の『ハムレット』の上演などにおいては公演についてのファンのツイートを上演会場であるパービカンの劇場の壁に投影することにより、祝祭的な雰囲気高め、ファン同士の意見交換を促すというマーケティングを行っていた。一方、ファンの年齢層が高い国際ギルバート・アンド・サリヴァン・フェスティバルなどにおいては、ツイッターハッシュタグはあるもののあまり活発に使われておらず、むしろ長い書き込みを用いて情報交換ができるフェイスブックのほうがファンに好まれているようである。

ハッシュタグ以外にSNSで行われる情報交換としては、日本特有のものとして Together を用いた拡散がある。例えば英語圏における演劇の上演を記録して映画館で映像を配信するナショナル・シアター・ライブについては、字幕のクオリティに関してファンの間で議論があり、シェイクスピア劇の映像上映が行われるたびに字幕の感想をまとめた Together まとめが作成されていた。この Together まとめの内容の分析からは、日本においてはシェイクスピアが翻訳を通してある程度受容されており、ナショナル・シアター・ライブを見に来る観客は上演用の日本語訳と同じ程度のクオリティの字幕を期待して上映に来ていることがわかった。

研究成果については、予備的な観劇調査の結果が *Shakespeare Studies* 掲載の劇評、及び編著である『共感覚から見えるもの - アートと科学を彩る五巻の世界』に寄稿した論文「共感覚的演劇を求めて - 『驚愕の谷』からシェイクスピアまで」に一部含まれている。パービカンにおける『ハムレット』上演とファンのツイッター利用については、2016年3月にアメリカルネサンス学会で行った研究発表に部分的に盛り込んだ。この他、国際ギルバート・アンド・サリヴァン・フェスティバルを中心とした演劇祭でのツイッターやフェイスブック利用については、一般向けのイベントとして学習院大学身体表象文化学専攻と観客発信メディアWLの共催によって行われたシンポジウム「海外国際演劇祭サバイバルガイド」に登壇した際に発表した。このほか、2016年夏の世界シェイクスピア学会で、日本における観劇と Together の利用についての最終的な研究成果を発表し、コメントを受けて論文にまとめる予定である。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) Kitamura Sae, '[Review] *Hamlet* by Kakushinhan', *Shakespeare Studies*, 53 (2016): 72-74.

〔学会発表〕(計3件)

(1) Kitamura Sae, 'Playgoers Who Attend the Cinema: Shakespeare, Public Screenings and Negative Convergence in Japan', The 2016 World Shakespeare Congress, Stratford-upon-Avon, England, 2016/8/2.

(2) Kitamura Sae, 'Staging Dangerously Seductive Men in the English Renaissance', The 62nd Annual Meeting of the Renaissance Society of America 2016, Boston, USA, 2016/3/31.

(3) Kitamura Sae, 'A Shakespeare of One's Own: Female Users of Playbooks from the Seventeenth to the Mid-Eighteenth Century', The 43rd Annual Meeting of the Shakespeare Association of America, Vancouver, Canada, 2015/4/1.

〔図書〕(計1件)

(1) 北村紗衣編『共感覚から見えるもの - アートと科学を彩る五巻の世界』(勉誠出版、2016)。

本書に収録されている「共感覚的演劇を求めて - 『驚愕の谷』からシェイクスピアまで」(103-124)の観劇レビューに部分的に本研究の予備調査結果が含まれている。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

北村 紗衣 (KITAMURA, Sae)

武蔵大学・人文学部・講師

研究者番号： 00733825

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：